

「死ぬ日まで天をあおぎ／一点の恥ずることなきを／葉あいを縫いそよぐ風にも／わたしは心痛めた／星をうたう心で／すべて死にゆくものたちをいとおしまねば／そしてわたしに与えられた道を歩みゆかねば…」。

韓国では言わずと知れた、クリスチャンである尹東柱（ユン・ドンジュ）の詩です。彼は、日本の植民地化にあった朝鮮から詩を勉強するために、立教大学と同志社大学へ留学します。朝鮮の文字・ハングルによる詩作をしていたことを理由に、独立運動の疑いをかけられ、治安維持法違反により逮捕・投獄、27歳の若さで獄死しました。祖国の悲しみを胸に抱きながら、しかし、今抱かれる憎しみによってではなく、「星をうたう心で」、失われたものを抱きとめようとする赦しにも似た決意が、詩から感じられます。それは、「死ぬ日まで天をあおぎ」という信仰に支えられたものでしょう。「私」の思いではなく、「神」の思いが成ることこそ、人間の本当の喜びであると望み見て、今を受けとめ直していく信仰です。

本日のみ言葉には、「信仰を抱いて死」（13節）んでいったアブラハムとサラのことが述べられています。二人は、はるかに神の約束の実現を望み見て、喜びの声をあげたとあります。信仰がなければ見据えられない未来、感じ得ない喜びがあることをみ言葉は示しています。

主イエスは、平和への道の一つとして、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」（マタイ5:44）と勧めています。それは、「あの人もまた、私と同様に神に赦され、愛された者なのだ」という信仰によらなければ、踏み出すことのできない事です。相手は悪いヤツだし、社会から排除されても当然だというのが、人の自然な感情であり、誰からも責められない正当な理由になり得るからです。そこから思い切って一歩踏み出すためには、神が御心をなしてくださるといふ信仰が必要です。相手の見返りを求めてはできないことです。

もちろん、私たちの信仰は不安定なものです。しかし、確かさは私たちの信仰にあるのではなく、神の約束にあります。どんな暗闇に閉ざされるときも、私たちは死ぬ日まで天をあおぎ、「そこから、何が見えますか」と神に尋ね求めることがゆるされています。そしてそのたびに、主は「あなたがたに…わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな」（ヨハネ福音14:27）と約束し、応答してくださいます。アブラハムやサラのように、私たちが見えない未来に進むことができるとすれば、神がその約束の言葉で私たちを支えてくれるときです。

